

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:044-988-0004(柿生中学校)
<http://www.kakio-kyodo.com>
 第 81 号

鶴見川流域の鉄文化の痕跡を探る

鶴見川流域の鉄文化を科学の目が解き明かす

(1)砂鉄の存在と分析

12月20日柿生郷土史料館において第50回のカルチャーセミナーが開催されました。今回は「鶴見川流域の鉄文化を探る」と題して、講師に日鉄住金テクノロジーの伊藤薫氏をお呼びしました。氏の科学的視点をもとに最新の機器を使った手法で鶴見川流域の鉄関連物のサンプルを分析していただき、その結果を報告していただきました。分析をお願いしたサンプルの内容は、(1)鶴見川上・中流域 10 地点と鎌倉極楽寺川河口地点で採取した砂鉄、(2)タタラ実験によって得られた玉鋼(たまはがね=最上級の鋼)と鉄滓(てつさい=製鉄時に発生するカス)、(3)東柿生小学校周辺から採取された朱塗り土器小片、(4)片平川流域採取の鉄滓(水酸化鉄=リモナイト)でした。

柿生郷土史料館では平成22年3月にタタラ炉による製鉄実験を行い、鶴見川流域より採取した砂鉄約40キロをもとに4キロの玉鋼(たまはがね)を得ることが出来ました。この実験の目的は、鶴見川流域に多くの「鉄」に関する痕跡が残されていることに着目し、一つ一つ検証していく中で、鶴見川の砂鉄の存在を見つけ出し、これが、鉄器の製作につながることが出来るのかということにありました。確かに砂鉄は日本全国の河川には多かれ少なかれ確認することが出来ますが、鶴見川周辺の他の河川に比べて砂鉄の量が多いということも実験への意欲を高めてくれるきっかけとなりました。

鶴見川上流・中流域をいくつか区切り、特に支流の中小河川と本流が合流する付近を採取地点として設定し、サンプルを採りました。特に砂鉄が多く認められたのは横浜市青葉区市が尾高校裏手の親水地区で、川の流れを遮るように直角に突き出した木材のすぐ下流寄りの所に多くの砂鉄が認められました。これは丁度「鉄穴流し(かんながし=砂鉄採取方法の一つ)」の原理にもとづく環境だったものと考えられます。また、目測ですが、この採取地点の砂鉄は他のものと比較すると鉄の粒子が大きく、なおかつ砂鉄含有量が他の地点よりも多いという事が分かりました。これは、どうも50メートル上流に黒須田川が合流していることが大きく関係しているのではないかと考えられます。黒須田とは地名的に考えると黒砂(くろすな=砂鉄の意味?)と考えられ、流域には「鉄町(くろがねちょう)」、「剣山(けんざん)」等、鉄関連と思われる地名が見られます。しかし上流の王禅寺付近まで全流域を調査してみましたが残念なことにほとんどが河川改修の手が入っておりコンクリートで覆われていたため、サンプルは手に入りませんでした。しかし、鶴見川との合流地点では、やや多くの砂鉄の存在は確認されました。市が尾高校裏手から採取した砂鉄の成分分析によると、磁鉄鉱78%・酸化チタン9%・シリカ6%・酸化アルミと酸化マグネシウム合わせて1%・その他6%でした。鶴見川流域の砂鉄の多くは、分析の結果、粒子に多くの凹凸があり、火山灰由来と考えられるという見解でした。砂鉄は、その他、岩石中に含まれる磁鉄鉱等が風化の過程で母岩から分離し海岸に堆積したり山砂として堆積したものがああります。

柿生の大ヶ谷戸遺跡、日光台遺跡、横浜市都筑区の西ノ谷戸遺跡などでは主に平安末期と思われる鉄製品や小鍛冶(こかじ=精錬された状態の鉄を用いて製品を製作する最終段階の鍛冶)のものと思われる小型の羽口(はぐち=製鉄炉などの送風吹き込み口)の跡がいくつも発見されています。さらに、鉄滓等の分析の結果出土した製品のほとんどは砂鉄由来ではなく鉄鉱石由来との見解です。平安時代末期は武士団の成長のため武器や武具の需要が急激に増加したため、手間も値段もかかる砂鉄由来の原料をあえて使用するより、精製した原料鉄を他地域から移入して利用の方が遙かに合理的なことであつたに違いありません。それならば、砂鉄由来の鉄製品は作製していた形跡はないのかということになりますが、伊藤薫氏は、これだけの砂鉄が採取されるという事は、タタラ製鉄炉の存在や未発見の遺跡の中に砂鉄由来の鉄器が存在することが十分あり得ると感想を述べていらっしやいます。確かに、鉄町周辺では時代は不明ですが沢山の不純物を含んだ鉄滓が発見されています。これは、砂鉄由来のタタラ製鉄炉の可能性を示しています。

今後の課題として、新たな遺跡発掘に期待をかけるともに、純度の高い山砂由来の砂鉄の存在を見つけ出すことも重要な事であると思います。次回は朱塗り土器の分析について考えます。
 (文:板倉)



タタラから取出した玉鋼



玉鋼で作製した包丁

シリーズ

「麻生の歴史を探る」第52話

麻生の寺院(1) 金剛寺(廃寺)・西光寺

小島 一也 (柿生郷土史料館相談役)

麻生区周辺の寺院は、先に述べた王禅寺(第13号第12話)、東光院(第17号第16話)を除き、その多くが室町時代(1338～1573年)に創建されています。その理由は、最澄の天台宗や空海の真言宗に代表される奈良仏教が鎌倉時代になって法然・親鸞の浄土(真)宗、栄西の臨済宗、道元の曹洞宗、そして日蓮の日蓮宗を生み出し、そしてその新しい教えが新しい支配階級である武士や農民庶民の心を捉えたからです。

そこで、しばらく麻生の寺院の由緒・沿革を探ってみたいと思います。

現麻生区黒川の字西谷に「寺の谷戸」と呼ばれる地域があります。ここには応永年間(1400年頃)に創建されたといわれる「金剛寺」廃寺跡があります。この金剛寺を新編武蔵風土記稿(以下「風土記稿」という)は「村の西にあり、真義真言宗、多摩郡坂浜村高勝寺門徒なり、墨仙山と号す、開山を詳にせず、客殿五間に四間南に向う、本尊大日如来坐像にて長一尺五寸、行基の作という、当寺は祈願のわざを専らにして滅罪を事とせず、八幡社客殿の東にあり、観音堂同じく東にあり、如意輪観音にて長一尺ばかり、毘沙門堂行基の作にて、長七寸ばかりの坐像なり」とその寺域の広さ、諸堂の存在を記しています。

それではこの金剛寺は誰によって創建されたのでしょうか。風土記稿では「開山を詳にせず」と記されていますが、この地は鎌倉時代に栄えた小山田庄に近く、鎌倉街道「早ノ道」が関戸に通ずる道筋で、すぐ南側に隣接する地域が「広町」と名付けられ、三沢川上流に架かる「橋場」の地名があるように、古くからこの谷戸周辺には有力農民の集落がありました。今でもこの地には「市川姓」の在家が多くありますが、「金剛」とは堅固を表し、「墨仙」とは黒川(三沢川)を意味することから、この氏族の遠祖が、浜坂高勝寺の開山鎮海上人を奉じ、毘沙門天を祀り(毘沙門天は仏法の力で外敵排除、村内鎮護の神)氏族の願いを込めて創建したのではないのでしょうか。

なおこの鎮海上人は王禅寺中興の祖、等海上人に仏法を授けられ、応安元年(1368)稲城坂浜の地に岩船山高勝寺を創建した名僧でした(稲城市史)。

明治初年、廃仏毀釈の影響で金剛寺は廃寺になりますが、高勝寺には元治2年(1865)鑄造銘の「黒川山金剛寺」の梵鐘が保存され、檀徒とともに法灯は高勝寺に灯されました。今も残る毘沙門堂には、「おびあけ」のときの初詣・誕生・節句などに参詣する風習が残されています。



西光寺

黒川唯一の寺「西光寺」は謎を秘めた寺と思われます。風土記稿はこの寺を「禅宗曹洞派片平村修廣寺末山なり、雲長山と号す、開山孤岩伊俊、嘉吉三年(1443)寂す、開基は西庵雲長、文明元年(1469)寂す、石階九十八級を登りて客殿を建、九間に六間半巽(南東)向なり、本尊は釈迦の像なり、村民の持ち伝えし古き水帳には観音免とあり、其頃の本尊観音なりしが、いつの頃にか釈迦座像長八寸ばかりを置き、運慶作なりという・・・」としています。古老の話によると、98の石段には男坂と女坂があり、寺の北側には開基雲長の屋敷跡があったということで、現在「古屋敷」と呼ぶ通称地名が残されていますが、この雲長なる人物がいかなる人物であったか謎となっています。

中世、この黒川は武蔵国小山田庄黒川郷で、地形・水系からも片平以東の麻生郷とは異なり、領主は鎌倉公方方所縁の「御仁々局(如水)」でした。この御仁々局は応安5年(1372)黒川郷の半分を鎌倉円覚寺黄梅院(臨済宗)に寄進し、雲長が西光寺を創建した頃と思われる応永11年(1404)当時も黄梅院領だったとする資料(市史)があります。雲長の俗名は分かりませんが、御仁々局に代わる実力者であるところから見て、当時、西光寺は足利公方の臨済宗の寺だったのではないのでしょうか。

関東争乱で鎌倉公方が1439年に滅び、雲長が寂し、戦国時代となり、時代の趨勢の中で曹洞宗の片平修廣寺末となるわけですが、この寺には臨済宗寺院という前身があったようです。

この西光寺は昭和4年現在地へ移り、昭和50年現在の伽藍が落慶しますが、現境内に移された石仏の一つ、「石薬師像」は寛文8年(1668)造立された市内最古の石像で、また幾多の変遷を繰り返した墓苑には往時を偲んでの、住職山中善雄氏の歌碑が立っています。「いにしえの御霊うつしてぬかづけば 声なき声の我をつつめり」



石薬師像

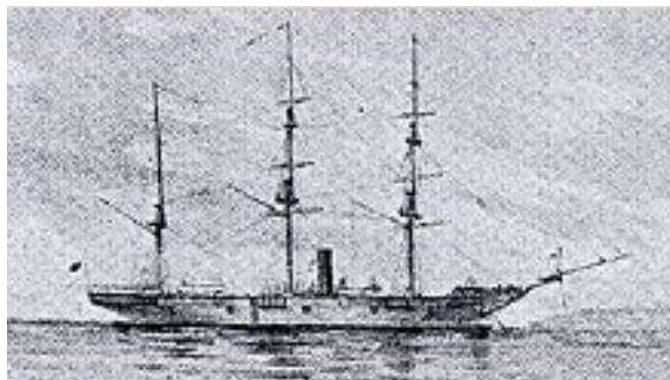
参考文献:「新編武蔵風土記稿」「川崎市史」「稲城市史」「黒川」「川崎地名辞典」

日の丸あれこれ (2)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆御国総標◆

1858(安政 5)年、幕府は米国との間で日米修好通商条約を結びます。その当然の帰結として、同条約の批准書を交換するために、幕府の正式使節団を米国に派遣することになりました。使節の派遣は、「締結した国際条約は議会の承認を得て初めて正式なものとなる」米国側の手続きを待つ必要があったため、1860(万延元)年となるのですが、派遣の準備を整える段階で、幕府はオランダに発注して 1857(安政 4)年に引き渡しを受けた咸臨丸を派遣することを決定します。そうすると、今までなし崩し的に使っていた朱の丸(日章旗)を、正式に国旗に準



1860年サンフランシスコに碇泊中の咸臨丸
(米国人の撮影した写真)

じるものとする必要となり、ここに幕府は、朱の丸を日本の「御国総標」とするというお触れ書を出したのです。1859(安政 6)年のことでした。

こうして咸臨丸は、1860(万延元)年日の丸を「御国総標」として船尾に掲げて、初めての外洋航海に出たのです。咸臨丸の一行は、サンフランシスコに到着後、帰国の途に就くのですが、新見豊前守ら正使一行は、パナマ地峡を経由してワシントンに向かい、米国大統領ブキャナンに面会して批准書を交換、その後ニューヨークを訪問して大歓迎を受け、米国旗である星条旗と共に日章旗が掲げられたブロードウェイをパレードしたことが米国側の記録として残されています。海外では朱の丸が日本国旗と認識されていたのです。

◆戊辰戦争と日の丸◆

さて、徳川幕府は皆さんもご存じの通り、戊辰戦争に敗れて消滅し、薩長連合を中心とする反幕府勢力が政権を掌握、明治新政府が誕生します。この幕末の内乱に際して、朱の丸はどう扱われたのでしょうか。

実はこの時、朝廷から「錦の御旗」を授けられて官軍となった薩長連合中心軍も、賊軍とされた幕府軍も、共に自軍の旗印として、朱の丸を用いていたのです。官軍が日の丸を用いたわけは、天皇家の紋章である菊をあしらった錦の御旗は、大量に作成してあちこちに下賜するわけにいかないため、各方面の本営に置かれ、前線部隊は別の目印を必要としたからでした。幕府軍も徳川家の家紋ではなく、御国総標とした朱の丸を使用していました。上野の山の彰義隊も、会津藩の白虎隊も、さらに奥羽越同盟軍や函館五稜郭の榎本武揚らも、朱の丸を使っていたのです。敵味方の区別が、かなり大変だったに違いなく、きっと敵味方共に相当の苦労を強いられたことでしょう。

◆太政官布告第 57 号◆

こうしたいきさつもありましたが、倒幕に成功して権力を掌握した明治新政府は、1870年2月27日(明治3年1月27日)に「商船規則」を制定して(明治3年太政官布告第57号)、朱の丸を「御国旗」と規定し、外洋を航海する日本船舶の船印、「商船国旗」に決めました。布告は日本船舶に対して、朝8時から日没まで、必ず朱の丸を掲揚することを指示し、掲揚なき場合は海賊船と認識され、各国艦船に攻撃されることになること、訓示しています。

しかし、この太政官布告においても、朱の丸の寸法は一つに絞ることが出来ず、何と大・中・小と3種類の朱の丸が指定されていたのです。縦と横の比は横10に対して縦7とされ、朱の丸の直径は縦に対して5分の3と定められたのですが、旗の寸法は最も小さいものでも、横6尺(約180cm)、縦4尺2寸(約126cm)ありましたので、あくまで商船用で地上用ではありませんでした。

ここから「朱の丸」を巡る迷走が始まります。同じ1870(明治3)年5月に太政官布告第355号が出され、今度は「陸軍御国旗」に関する定めが発表されたのです。こちらのサイズは横5尺(約150cm)に対して、縦4尺4寸(約132cm)と正方形に近い形になっていました。さらに「朱の丸」も横の直径の3分の1に縮小し、そこから旗の周囲に対して16条の旭光が伸びる形とされたのです。年配の皆さんはご存知の「旭日旗」です。後の大日本帝国陸軍の連隊旗の原型がここに誕生しました。

閑話休題

余談になりますが、3月末に出された太政官布告は第57号で、3ヶ月後5月末に出された太政官布告は第355号です。僅か3ヶ月で300本もの太政官布告が出されています。これに対して明治元年から3年2月までは、僅かに50本程度です。ここから明治国家の統治体制が、明治3年に至ってようやく整ってきたらしいことが、確認できます。



オランダ留学当時の榎本武揚
(1863年頃撮影)

(続く)

柿生郷土史料館をご支援下さっている法人会員をご紹介します

温かいご支援に感謝申し上げます

1月1日現在 59法人(順不同・敬称略)

- ★ノジマNEW鶴川店★FISH・ON!王禅寺★まつや★孝友商事★美容院 Luci★レストランベル★とん鈴
- ★神奈川トヨタ自動車(株)麻生店★フラワーショップまきば★ガスト柿生店★ラーメン信華★小料理わかば
- ★広東商事★菊川園★サイトウ農芸★ブックポート203栗平店★カラオケゆう
- ★柿の実幼稚園★柿生保育園★川崎青葉幼稚園★和光大学附属梅根記念図書館・情報館★桐光学園
- ★(有)白百合商事★誠和産業(株)★杉本電気管理事務所★(有)青戸建材店★(有)荒川電気工事★(株)カジノヤ
- ★朝日ホーム★(株)三共エステート★栄運輸(株)★(株)ティエムコーポレーション★(有)柿生恒産★(有)山義産業
- ★(有)粕谷住宅資材★エムケープリント★プライマリー(株)★川崎信用金庫柿生支店★(有)志田電子製作所
- ★長瀬敏之土地家屋調査士事務所★JAセレサ川崎柿生支店★(株)ささらプロダクション★(有)麻生自動車
- ★リック設計企画(有)★(株)ホシノ商会★(株)北島工務店★奈良工業★(株)観財★(株)スズユウ商事★(有)栄和
- ★月読神社★琴平神社★王禅寺★浄慶寺★常安寺
- ★虹の里養護施設★麻生総合病院★たま日吉台病院★アルナ園

柿生郷土史料館開館日のご案内

◎開館日:偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日

2月 7・14・21・28日(毎土曜日) **3月** 1・8・15・22日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時

柿生郷土史料館11月以降の催物ご案内 (入場無料)

第7回 特別企画展

「新聞で見る近代日本の歩み」展

■■■ 明治・大正・昭和の歩みと人々の生活 ■■■

- ◆期 間:平成27年1月25日(日)～3月29日(日)の開館日
- ◆会 場:柿生郷土史料館特別展示室
- ◆内 容:◎明治・大正・昭和の歩みを実物の新聞や号外をもとに考えます
◎人々の生活がどのように変化してきたのか考えます
◎日本の政治と対外関係について考えます



日本に初めてスキーを
紹介したレヒル少佐←

第52回 カルチャーセミナー

シンポジウム 小島一也氏を偲んで

日時 3月15日(日) 午後1時30分～

会場 柿生郷土史料館

昨年12月5日、逝去された元柿生郷土史料館支援委員長の小島一也氏の業績や人となり、共に歩まれた方々よりお話を頂きながら、在りし日の氏のお姿を偲びたいと思います。たくさんの方々のご参加をお待ちいたします。



ついに完成!

ふるさと柿生の記憶をDVD化

第1弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」

◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

柿生郷土史料館では、郷土に今日まで継承されてきた貴重な無形文化財を映像に残し、長年培われてきた人々の思いを後世にしっかりと伝えていくために、柿生の無形文化財を映像化していきたいと考えています。

今回は、その第1回目として、上麻生浄慶寺境内に在る秋葉神社で毎年10月17日に行われる「秋葉講」を撮影し、秋葉神社が何百年もの間、存続してきた理由や人々の思いについても視点に入れながら、DVD制作に取り組んできました。

この映像は特に川崎市に居住されている方々にはぜひとも視聴していただきたいと思います。川崎という大都会の中であって、現代人が忘れてしまいかけている何かを気付かせてくれるかもしれません。

なおDVDをご希望の方にはお分けしておりますので、柿生郷土史料館に直接お越しいただき、お申し出ください。なお、その際、史料館の諸活動支援のためご寄付にご協力いただければ幸いです。

